

(続 端無常三郎) 【 】内は前号の言葉。

【あし】のつまさきまで、みな神様のかりもの、かりものであ
ろふ。なぜともふすならば、いまいきて、じゆふじいざいに
なるとゆふハ、なんのおかげでござりましょ。じきもつわ、あ
らばこそ、いきているのでござりましょ。しからば、じきもつわ、
なんのをかげでござりましょ」(12オ)

もつたいなくも、てんの月日、すいき(け)ぬくみわ、はる、なつ、
あき、ふゆふの四気(四季)にわかれて、ごしうごくださるから、
ごたく、そをもく、りゆふけいつさいを、つくりくださる上に、
人間わ、なに一つもふじゆふなく、くらせるのでござりましょ。
又人間心ろで、もす」(12ウ)

なら、わがからだ、わがものである、わがめでゑみる(みゑる)、
わがくちでゆふ、わがてです、わがあしであゆふむ、わがち
ゑで、しゆふせはつだつといゑども、すこしでも、かはねのき
れるときハ、じゆふぶとなす事わできまゑ、もと々神様のを
こしらゑくだされたる、御く」(13オ)

すりか、又ハ神様ゑ、きがんをするか、せねばならまゑ。又人
間をこしらゑるにも、わがふう〜でつくと、をもゑども、
わがふう〜で子がつくれるならば、子のなき人と子のありす
ぎる人、ありそな事わない。又わが子、わがつくるならハ、い
ざりめくらをしつんぼ」(13ウ)

をこしらゑるをやわ、ありそな事わござりますまゑ。しからば、
人間みのうちわ、神様のかりものかしものでありまあしよ。ゆ
ふわゑる、わがくにの、もとないせかい、ない人間をつくりく
だされた国常立の神、に、よくんの神、あやかしこねの神、く
にさつちの神、つきよみ」(14オ)

の神、この八はしらの神様のかしものかりものでありましょ。
又このいざなぎの神、いざなみの神、この二はしらの神様ハ、
人間のふたをやとなり、人間をこしらゑくださつたが、圓いゑ
に、わがくにの人ハ、たにんとゆふわ、一人もござりません。
しかゑけいてならば、たがい」(14ウ)

たがいたすけやい、ころぶものならばをこしてとうり、きれる
ものなら、つないでとをるとゆふわ、しとを(至当)の人間
でござりましょ。かくのごとく、たかいたすけやふわ、しとを
の人間でありまするが、それとにかく、よのなかにハ、しゆふ
じん、をやさまにむかつて、あくわ」(15オ)

ぎをむかい、をつとをころし、によぼをころし、子をころし、
しゆふじさまへ、をこないするものもござりまするが、これ
らとゆふわ、ばんもつの、れ(霊)どころでない、にんめんと
ゆふてよかる、をもいまするそよ」(15ウ)

16オ～ウは白紙。

17オ～39ウは「神の古記」が記されているが略。

40ウ～48オは、「明治廿二年旧十月十五日午後十時四十分」
の「おさしづ」を記載。おさしづ書では、明治22年11月7日
午後10時40分 刻限御話、に相当するもの。

48ウは白紙。

49オ～ウには、次の一文あり。

あちらもじいしよ、こちらもし上、ゆうことわ、かなゑ(家内)
むつまじないとゆふこと。

こんなじ上かいな、こんなじ上かいなゆふハ、これまでの
んたゑ(反対)、をくのひとに、あいとゆふ事なくはいかん、
をもしもせず、とをれば、けこなみちがある
あいそすかぬよ(愛想尽かぬよう)

49ウの途中から、お話が記述されている。

此、天理教会の本部ハ、やまとの国山辺郡三しま村五番地ニあ
りまして、此をしゑを、おひろめあそぼしたる教祖様と申し
ハ、をんなごでありまして、もとより、ちゑのありまた」(49ウ)
御かたでもなく、がくものひろいをかたでもな、あらず、ち
方でな(御名)のミたかきをかたでもない、只けつこふな事、
まことの心を御あらわしなされたゆへ、てんの月日様が、その
せいしんをうけとりあそぼして、月日様があまぐだりての、御
ハなしであります。そこで此のてんり」(50オ)

王の命さまとわ、国常立命様、おもたるの命様、くにさつちの
命様、月よみの命様、くもよみの命様、かしこねの命様、たい
しよく天の命様、大とのべの命様、いざなぎの命様、いざなみ
の命様、此、十様の神さまをあわして、天理王の命様と申します。
此御ハなしにハ、人間日々くらす」(50ウ)

その中二よき事も、あしき事も、みなめへめゑのしてきた事
はゑてきたのである、との御ハなしであります。人間のしてきた
事、よきもあしきも、どうしても、これわみなはゑてををにや
ならん。どんな病気に、かゝるも、さいなんにおうのも、又し
やわせのよきも、あしきもみな」(51オ)

めへめゑのたねまいたら、はゑてきたと、きかせられ舛。第一
人間わからだほど、たいせつなものわあるまい。どんな事でも、
からだがあるからでける。くう事もきる事も、すむいゑも、か
らだがないにや、いらんもの。此からだがあるゆふへに、はた
らかにやならん、くわにやならん。そのは」(51ウ)

たらくからだわ、だれのをかげや、みなかみさまの御かげであ
ります。なにほど、はたらかにや、くう事ができんとゆふても、
やまいでなんぎしていたら、なをくう事も、はたらく事ハでけ
まい。そうしてみれば、びんほのひとほど、なをしんへして、
たつしやで、くらさしてもらわにやならん。」(52オ)

そこで神様ハ、人間の一番なんぎする病のたねと、むほんの
ねへをきるとの御ハなし。此やまいわ心から、みなできてくる。
じせつでハない、うんのわるでわない。みなめへめゑの心から、
おこる事ときかせられます。やまいわ八つのほこりより、はじ
まる。そこで、此の八つまよいをやめ、身びいき、みが」(52ウ)
つてせぬよふに、御ハなしどふり、心をなをせば、やまいのね
ゑわきれてしまう。かみさまの御ハなしどふりになれば、やま
ず、よわらず、百十五才までの命とする、との御ハなし。此か
らだわ、かみさまのかしものゆふへ、かみさまの御じゆうなり。
人間のおもふとうりにハなりやせん。神さまわ」(53オ)

月日様、すなわちをやさまなり。親様とわ、水と火なり。せか
いのばんもつ、みな火と水とのをかげで、そだつ事ができる。
水と火との御とくをはなれて、そだつものハあるまい。人間ハ

此ふたをやのをんかげで、でけたものであります。さすれば、せかい中ハ、一れつみなきやうだいなり。」(53ウ)

た人とゆうハさらになし。をやさまためにわ、みなこどもなり。それしらず人間わ、われさいよければ、人わどうでもとをもち、みびいき、みがてをだし、今日さゑよくバとおもい、あすのひもしらずにくらす、この子とも、おやのめよりみれば、いじらしいとの事。それ人間ハ、このをやの」(54オ)

ごをんをしらずして、だゝにちにち、いつもしゆふわでけるものと、をもう心ハみなちがう。人間のとうるみちすじハ、かみさまの御心にならず、それゆへに、ついにやまいとなり、みがなやまにやならん。又かりものをかゑさにやならん。人間ハしにゆくなど、ゆふけれども、しにゆくでわ」(54ウ)

ない、かりものをかゑすのや。それとても、ながくかりたる、このからだ、めゑへのつねに心ろゑちがいして、むねにほこり一ぱいつもらすゆゑ、かみさまわ、なかゑいりこんで、はたらく事がでけんゆへ、よぎなく月日さまがしりぞきなざる。これを、きものにたとゑて、はなしする。あかのつきたるものハ」(55オ)

たれもきている事ハでけまい。ぬぎすてにやならん。それをもをなじ事。心にあかをつけるゆゑ、神様がぬぎすてなざるなり。よつて、しんゆふかにやならん。これ、みなにちへの心をちがうゆゑに、はやく、かりものをかゑさにやならん。おやのめゑよりみれば、にちへやむ事なく、なんぎする事ない」(55ウ)

よふにと、をもうてするハはやくしぬよう、やむよふな事をして、じいみよ〈寿命〉のきりうりをしているよふなもの。それゆへに、九十九才のじみよふをみちかくして、はやくしなやならん、かみ様のをはなしに、人間ハもふ五十やと、をもゑバこのよをハ、なきものゝよふ、をもゑども、神のめゑにハ、まだ」(56オ)

さきがあるとのをはなし。このたびわ、どうぞせかいの人間百十五才じようみようと、さだめたいとの、をやさまのをもわくゆへ、いろへとくどうくへにかき、はなしをきかせるなり、いけんするなり、これとても、にくさでわない、かわいゆゑから、いけんするのや。めへへも、わが子ををもうてしやんして」(56ウ)

みよ。どうぞ、わが子をまことの人にしたいゆへから、つらき事もゆうてある。神様の心も同じ事。それに、をやのゆう事しんじつきいて、めんへの、これまでとをりきたるところ、みなわるかつたと、をもうて、神様へをわびして、心あらためて、たがいたてやい、たすけやいの心になり、まことの心になり」(57オ) まことの心になれば、わがみのうちわ、どんななんぎも、これたすからんとゆふ事なし。心しだいなり。このたびハ神様が、このよのたてかゑ、人間の心のいれかゑ、人間のむねのそうじするとの事。みづわ神とわをなじ事、心のごれをあらいきる。このはなしも、にんげんむねのほこりをそうじする」(57ウ) なり。それゆへに、きとうするでなし、をがみするでなし。たゞをはなしち上であります。此たびハ、やまいをなをすでない、心をなをしの、しんしんなり。それゆへに、をはなしをよ

くきかせるなり。やまいとをもゑバ、くすりをのむべし。くすりハやまいを、なをすなり。」(58オ)

神様ハ、これまでに、しうりこゑのほそみちに、いしやくすり、をがみ、まじない、きうやはり、ゑきはんだん、いろへのほそ道につけてをひた。これもみな、もとなる神様のをしゑ下されたる事なり。いままでハ人間こどもゆゑ、ちゑのしこみのため、かみやほとけやとて、金や木やカみでこしら」(58ウ)

ゑたるものを、をがみてきたなれども、此たびハ、人間ちゑのしこみのため六千年、しよもつのしこみ四千年、もふ十分の人間なり。こくげんきたり、ひも十分つみきたゆへ、とうも、かねや木や、かみのなかゑハ、月日がいりこむ事がでけんから、そのほそみちのしうりこゑわ、じこくがをくれ」(59オ)

ているなり。さくもつにたとゑたら、あきにみをとらんため、はるやなつ二うちにこゑをして、あきがくれバ、もふこゑわきくまい。そのごとく、もふこんどハ、まことしんじつの、みをとる、との事。それゆへに、みなをはなしち上で、みのうゑたすかる、これしよふこふなり。十年廿年も、いしやにかゝり」(59ウ)

て、こふのふなきものが、このはなしきいて、みのうゑたすかれバ、これだいいちしよこふなり。それなぞ、もうたがいのなきために、をびやいち上ゆるしなり。やまとのぢバわゑゆきて、をびやゆるしをいたゞけば、はらをいらす、もたれものいらす、どくゆふみいらす、つねのからだで」(60オ)

けがれなし。あんざんする。これしよこふゆふるしなり。せかいに、しよふこふだして、人とたすけするところ、またとあるまい。このよをの、もとなるいんねんあるゆへに、せかいにないたすけをするなり。このたびハしよもつによりて、あじめたでなく、ちしやがあみだし」(60ウ)

たでなく、もとなるをやさまが、せかいにない、みちをつけ、人間のみぬこと、しらぬ事、みなといてきかする。よつて、うそをもへばうそになる。まこと二をもゑバまことになる。うそをもうて、うたがゑば、ごりやくわなし。いまへでバ、せかいぢううハ、みなこども、なにもしらずに、くらしている。このたびハ、もと」(61オ)

この話はここまでで、以下は記されず、途中で終わっている。61ウ～64オは、言葉の習作が書かれている。64ウ～65オに、次の一文がある。

なるいんねん、よろずいさいを、みなといてきかし、せかいぢうハ、みな一とすじみちをきかして、まことの心になし、すいなんも、くわなんも、びようきびよなんも、てんさいもないよふに、さくぬみ□よにして、よふきくらしの、よふきづとめさすとの、をはなしゆへ、どうでいづれみな、このみちにつかにやならん、まもらにや、心のかいりよふせにやならん。そむけバ、みのうゑにあらわれて、なんぎせにやならんとの事。つゞしむべし。

※文中に現在使用されていない言葉があるが、歴史的文書の翻刻なので、原文に忠実を旨としていることをお断りしておく。